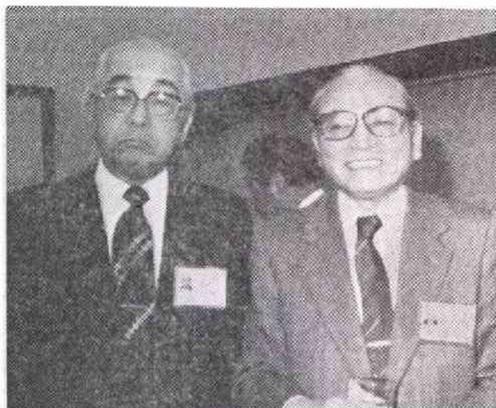


日本記者クラブ会報

原、高田両氏を名誉会員に

新年互礼会で会員に披露

一月十九日に開かれた第七十二回理事会で、当クラブ初代理事長の原四郎氏ならびに第二代理事長の高田秀二氏を名誉会員に推挙することを



名誉会員証を胸にした原四郎（左）と高田秀二氏

決め、つづいて開かれた第二十二回総会でも満場一致でそれが承認された。同日は午後六時からプレスセンターホールで恒例のクラブ主催新年互礼会懇親会が開かれたが、その席上でこのことが参加会員に披露され、懇親会に出席した原、高田両氏に新井理事長から名誉会員証が手渡された。

当クラブは本年十一月に創立十五周年を迎えるが、昨年はじめごろから会員の間に、草創期の功労者などクラブに顕著な貢献をした人びとの処遇を考えるべき時機にきているのではないか、という声が出ていた。昨年五月に発足した新理事会はこの

第168号
1984年
2月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二二(代)

声を取りあげ、総務委員会で具体案を検討中であった。一月十九日の理事会で、渡辺総務委員長から検討経過と結論が報告され、とりあえず定款の定めるところに従って原、高田の両氏を名誉会員に推すとの総務委員会案が、そのまま理事会で議決された。なお総務委員会での検討過程で、新たに終身会員制度を設けるなど、定款の改正を必要とする案も考慮されたが、それらを含めて他の功労者の処遇については、時機をみてさらに総務委員会で検討することになっている。

饗庭孝典氏 (NHK)

二千人目の会員
日本記者クラブの会員数は昨年十二月に二千名をこえたが、同月から新たに入会した会員のなかから厳正な抽選の結果、日本放送協会解説委員の饗庭孝典(あえばたかのり)氏が二千人目の会員に選ばれた。

同氏は昭和五十一年から五十三年まで当クラブの会員であったが、ソウル特派員となったため退会、その後北京特派員も勤めて昨年末帰国、再入会した。

一月十九日に開かれた新年互礼会に参加した饗庭氏は、二千人目の会員として出席者一同に紹介され、会員資格委員会の水上委員長から記念品が贈られた。

会員数はその後も伸び続けて、左欄のように二月一日現在で二千二十二名となった。昭和五十一年のプレスセンター移転直前の会員数のおよそ二・四倍である。また原、高田両氏を新たに加えて、名誉会員は千葉雄次郎氏および日本記者クラブ賞受賞者十二名のうち十一名(一名は辞退)と、計十四名となった。

二月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六三三人
個人会員	一、一〇〇人
法人・個人賛助会員	六一社 一七九人
特別賛助会員	七六人
名誉会員	一四人
計	二〇七社 二、〇二二人



'84 新年互礼会

大雪の中、二八八名が出席

東京地方が十五年ぶりの大雪に見舞われた一月十九日(木)、恒例の新年互礼会員懇親会が、午後六時から十階のプレスセンターホールで開催された。
積雪二二センチとなったあいにく

の天候にもかかわらず、二八八人が出席、にぎやかに歓談した。

まず、新井明理事長が、「今年には『前途風雨強かるべし』という気がしていたが、それに『雪』まで加わった。しかし、困難な問題が多ければ多いほど、ジャーナリストにとってはやりがいがある」とあいさつした後、クラブの一層の発展を祈り、全員で乾杯した。

続いて、第二十二回(臨時)総会で名譽会員に決定した、原四郎、高田秀二両元理事長が会員に紹介され、新井理事長から名譽会員証が贈られた。

原氏は「五十年、新聞記者一筋でやってきたが、これほどの名譽はない。とても光栄だ」とあいさつ、高田氏も「身にあまる光栄。記者をしてよかったな、とつくづく思う」と喜びを述べた。

原、高田両氏は早速、名譽会員証を胸につけ、会員からの祝福を受けた。

野口氏、満点ただひとり



次に「昭和58年予想アンケート」の結果(別掲)発表があり、応募三〇六

人中ただひとり、十問全てに正解を示した野口哲郎氏(徳島新聞)に、藤村邦苗企画委員長から表彰状と記念品が贈られた。

初めてのアンケート投票で満点獲得の野口氏は「まさに『奇跡』でして……」といささかテレながらあいさつ(写真)、会場から盛んな拍手をあげた。

正解率の一番高かったのは「田中有罪判決」で、九三・一%とダントツ。逆に一番低かったのは「試験管ベビー」で二〇・六%。日本ではまだまだ倫理的にムリとの予想だったのでろうか。また、大関若島津も多くのお相撲好き会員の「期待」を裏切って、横綱昇進ナシで、二九・四%の低い正解率となった。

第11回「予想アンケート」の結果 (昭和58年1月20日実施 応募総数 306)

質問	正解	正解率(%)
1. 衆参同日選挙が行われるか。	行われない	32.7
2. 東京外為市場の年末引け値が1ドル220円より円高になるか。	ならない	55.9
3. 総理府統計によるわが国の11月の完全失業者数が150万人を超えるか。	超えない	66.0
4. レーガン・アンドロポフの米ソ首脳会談が行われるか。	行われない	50.0
5. イラン・イラク両国により停戦協定が締結されるか。	されない	73.5
6. レーガン米大統領が訪日するか。	する	53.9
7. 田中有罪判決が出るか。	出る	93.1
8. 新大関若島津が横綱に昇進するか。	しない	29.4
9. わが国でも試験管ベビーが誕生するか。	する	20.6
10. 日本人(日本国籍)から本年度ノーベル賞受賞者が出るか。	出ない	70.9

新年早々、びっくりさせられた。記者クラブから若い女性の声で、「新年互礼会にぜひ出席して下さい。予想アンケートであなたを表彰します。満点は一人なので欠席されると困るんです」という電話。当方は、短略化すれば「エッ、ウッソノ、ホント?」といった意味の返事をしたようだ。たまたまかけるように、「感想文も書いて下さい。どんな問題だったかも忘れていて下さい。参考までに送ります」。にくいことをおっしゃる。事実その通りで覚えているのは二、三問だった。

予想アンケート 満点の弁 ビギナーズラック

問題を改めて見て、よくぞ当たったと驚いた。初めての応募で「記者クラブらしい面白い企画だなあ」と考えながら気楽に書いた。釣りの初心者だが、連れて行ったベテランより大釣りする場面はよく見る。とんでもないポイントで、意外な大物を釣り上げる。ビギナーズラックとはこんなものか。
ヘソ曲がり思考も幸いしたのかも知れない。
一年前、衆参同日選挙はほぼ確実と

見られていた。その声は政界でもますます強まる傾向にあった。だが、何らかの形で反作用が働き立ち消えになる可能性もある、と見た。この問題には大半が同日選挙ありと答えると思った。それなら逆に、とアンチ巨人的精神も働いた。

田中判決の問題は、予想に従って有罪の方にしたが、敢えて有罪なし、とした人も同じ考えだったと思う。

野口哲郎

(徳島新聞東京支社編集部長)

表彰を聞いて女房殿は「よほど知った人か、全然分かってない人しか当たらんのと違う?」とのたもうた。もちろん、わが亭主は後者の方だと知っての発言。腹は立つが一面を突いている。

今年は小生、ネズミの年男。昨年末から「運氣」は上向き、最近始めたゴルフを除いては、大当たりが続いていた。暮れのマジシャンでは、とうとう国士無双に打ち込んだ。当たり過ぎも良くない。気をつけねば。何はともあれ、ありがとうございまして。

二千入目は饗庭氏に



引き続き、二千入目の会員の発表が行われた。

クラブの会員数は昨年十二月に二、〇〇四名となり、同月入会した会員の中から抽選で二千入目が決められた。その幸運を手にした饗庭孝典氏(日本放送協会解説委員・写真)には、水上健也会員資格委員長から記念品が贈られた。

饗庭氏は「これまでもつばら従軍記者みたいだった。戦場の取材でも、タマにも当たらず戻ってきた。それがこんなラッキーなことになるとは、うれしいですネ」と語った。

原さんに福引一等賞

続いて、お待ちかねの福引に移り、抽選が行われた。

一等の東山魁夷画集(日本経済新聞提供)を射とめたのは、なんと、この日名譽会員になったばかりの原四郎氏で、会場からは「オー」とい

う声上がる。間もなく、渡辺誠毅元理事長も駆けつけ、「原さん本当におめでとう」。「クラブも育ったネ」と草創期の思い出を語り合っていた。

なお二等、三等の景品を当てた方がたは左記の通り。(敬称略)

鈴木幸夫(テレビ東京)、朝吹誠(海外広報協会)、榎本晃章(東京電力) 以上二等。小巻元隆(毎日放送)、上田彦二(FM東京)、オーエン・トレイラー(英大使館)、前田源一郎、遠山雄二 以上三等。

雪のため常連の千葉雄次郎さん、岩佐直喜さんから長老会員は残念ながら欠席したが、クラブの成長と会員のクラブへの愛着を示すような盛会ぶりだった新年互礼会の熱気は午後八時まで続いた。



笠置事務局長から景品を受けとる原さん(左)

とっておきの話

ケネディの死んだ日

吉村 克巳

一九六三年十一月二十五日付の私の日記をみると、ライシャワー駐日米大使との会談の記録がある。J・F・ケネディ米大統領が暗殺された二日後のことである。たいした中身でもないのにoff the recordとなっている。非公式の会談でもあり、先方の希望にそったものだろう。

枕元の電話がけたたましく鳴っている。馬鹿野郎と思いつながら手を伸ばす。興奮した声が耳に飛び込む。「ケネディが殺された。すぐ出てきてくれ」。びっくりして布団をハネのける。十一月二十三日午前四時すぎのことだ。

その二日前二十一日は、池田内閣下第二回目の衆院総選挙の投票

日、二十二日には全議席確定、選挙は終わった。その夜は大いに呑んで午前二時すぎ帰宅、倒れるように寝床へ入ったばかりだった。迎えの車に乗る。外はまだ暗い。待てよ、確か「ダラス」と言ったな、と思った途端にハッキリ目が覚めた。

ダラスという町

その二年前、私はダラスに一週間いたことがある。そのとき聞いた南部特有のジョークを思い出した。当選したばかりのケネディがテキサスにやってくる。満面笑みを浮かべてダラスの街を歩きながら道行く人たちに握手を求める。人々は怪訝な面持ちで二人に一人しか手を出さな

い、というものだ。

六〇年の大統領選挙で民主党リベラルのケネディは、テキサス出身のジョンソン上院院内総務、レイバーン下院議長と手を組んだ。

ジョンソンを副大統領にすることで南部やテ

キサスの民主党保守票を手に入れたのである。しかし大統領選挙人の得票は、全米で十一万余、テキサスで四万三千の勝ちだったが、ダラス郡ではニクソンに六万の差をつけられた。

ジョンソン昇格で空席となった上院議員選挙がテキサスであった。プライマリ制度をとっていないので、なんと七十一人もの候補者がでてきた。選挙は法定得票数に達する者がなく再選挙で、ジョン・タワーという弱冠三十四歳の大学教授が当選した。なんと南北戦争以来九十一年目のテキサス、いや南部初めての共和党上院議員だ。民主党の保守票がタワーに流れたのである。保守中の保守派、今年引退するといわれるタワー

上院軍事委員長誕生である。当時のテキサスが、そういう雰囲気であったことは事実である。しかし、だからダラスでケネディが殺される、ということにはならない。

アメリカ大使館からの電話

休日の二十三日も日曜の二十四日も、ケネディに追い回され、また呑んで深夜帰宅したら、米大使館のN・B・セイヤー広報官から電話があったという。

電話すると、「すぐきてライシャワー大使に会ってもらえないか。エマーソン公使もオズボーン一等書記官も待機している」と言う。「何事だ」ときいたら、「ケネディ暗殺の日本へおよぼした影響について、ワシントンへ報告書を提出しなければならぬ。新聞をみると、まるで日本の大統領が死んだみたい紙面で、日本の政情が全くつかめない」と言う。確かにそうだった。

安保騒動で岸退陣のあと登場し

た池田首相は、ケネディとの首脳会談で日米パートナーシップを謳歌していた。突然のケネディの死で、米大使館が日本の対応に不安を感じたろうことは想像に難くない。

私は、彼らの求めている情報が何か、分かった。「私の独断的な意見を言うよりも、各社の政治部長諸君と一緒に会おう。その方が広い見解を聞けるはずだ。彼らには私が連絡する」と答えた。

翌二十五日午後、米大使館の大使公邸に集まった。柴田（朝日）三浦（毎日）森田（読売）新井（日経）酒井（共同）緒方（NHK）



吉村克巳（よしむらかつみ）氏略歴 一九一九年（大正八年）広島県生まれ。慶応義塾大学経済学部卒。軍務のち、四六年（昭和二十一年）時事新報社に入り、政治記者となる。五五年サンケイ新聞に転じ、六二年政治部長、時事新報社取締役。七〇年フジテレビに転じ、報道局長、取締役、常務を経て、七五年専務となる。八一年定年退任。現在、サンケイ出版取締役会長。七七年五月から四年間、日本記者クラブ副理事長。

の諸君である。

大使は、「ケネディ暗殺に政治的背景はなく狂人の行為だ」と断定したあと、「米の対日政策に変更はない」「私は引き続き大使の任に当たる」と述べた。ただ気にかかったのは、「南ベトナムやインドネシアのように動揺している国々、対ソ、対中外交は難しい状況になる可能性もある」という点だった。

大使の危惧の通り、ベトナムはジョンソンの下で泥沼に陥り、インドネシアは親共的なスカルノ支配を覆した。のちに大使が辞任したのはジョンソンの政策に不満を持ったからだ、と著書で述べている。

ライシャワー大使への提言

大使は、言葉を改めて「日本国民や指導者の中に、ケネディからジョンソンへの交代で、米の対日政策が変化し貿易差別などが強化される、という不安が起きるのではないか。この点について何かサジェスチョンがあれば承りたい」。

池田内閣下の高度成長政策で日米

間の貿易摩擦の萌芽が、日本繊維の輸入制限という形で出始めていた。池田―ケネディ会談は、経済関係の軋轢を事前に防止するため、日米貿易経済合同委員会の設置を決め、第三回合同委は二十五日から東京で開くばかりになっていた。

ケネディ暗殺の時刻、ハワイ西方を飛行中だったラスク國務長官以下六閣僚は直ちに引き返した。ワシントンは今や日本の思惑などかまっておられない。セイヤーの電話で直感した通り、大使のききたいのはこの点だった。

「ジョンソンは外交的経験が豊かでなくとも、ヨーロッパとの関係は処理できるだろう。しかし、ケネディの示した日本への理解をジョンソンに期待するのは無理かもしれぬ」という日本人の感情と不安がある。この漠然たる不安の掃は、万言を費やすよりも行動によって示すべきだ。合同委を早く再開すべきだ」

「ワシントンは今一か月は動けまい。クリスマス前後はどうだろうか」「今すぐ合同委の再開を日本側へ確約すればよい。来年一月にでもラ

スク國務、ジロン財務、ホッジス商務の三長官くらいの主要閣僚の訪日でよからう」

「私はただいまのご発言の趣旨にそってワシントンへ報告したいと思う」

応答の要旨はこのようなものだった。ワシントンは合同委の早期開催を確約し、事実一月にラスク以下五閣僚を迎えて東京で開かれた。

政治部長の発言がどこまで効果をおよぼしたかは分からない。しかし緊急時にジャーナリストの意見をきく、という発想は、ライシャワー時代の米大使館の空気をよくあらわしている。政財界のトップ情報に頼って安保騒動を読み間違えた、マッカーサー二世大使時代の教訓がよく生かされていたのである。ほかにいくつもの事例がある。

ただ断っておくが、このことはライシャワー教授のいくつもの著書には、全く触れられていない。学者外交官の誇りからだろうか。

レーガン・趙紫陽会談

ワーキングプレス

着任早々、時差ぼけと睡眠不足から脱け切れないうちに来た最初の仕事で、趙紫陽中国首相の米国公式訪問だった。同業者を指して「新聞は……」などというのは失礼かもしれないが、「日本の新聞は中国と米国が好きたから、この二つが一緒になれば大騒ぎだろう」と、事前からかなり緊張した。

「反共一辺倒、台湾支援強硬派のレーガン大統領が、二大共産国の一つの首相をホワイトハウスに迎えて、初めて親しく会談する」という歴史的イベント。しかもそのあとに、レーガン大統領の初の訪中を控えており、ソ連を強く刺激することでもあろう——という意味から、あさつての新聞の大見出しの活字が頭の中を何回もかすめたものだ。

ところが意外にも、世論もマスコミも沸かなかつたのである。「ワシントン・ポスト」紙は「五年前の鄧小平氏訪米時に比べて何たる違いか」とかの有名なカウボーイハット姿の鄧氏の写真を再び掲載して、盛り上がるのなさを強調した。首脳会

談はロウキーなものに終わったのだ。

それは趙紫陽首相の地味な人柄の影響もあった。米国側が四月のレーガン訪中を米中関係緊密化のピークにもって行くため、抑制ぎみに行動したことも大きい。しかし最大のポイントは、中国側が政治的に米国に歩み寄らず、「近代化計画への協力取り付け」、米国の資金力、技術力の中国への導入促進、という経済協力の側面に焦点を絞ったことにある。

女性記者の質問が

大ニュースを生む

山本一郎

(時事通信社ワシントン支局長)

米中産業・技術協力協定の調印によって、これまで中国市場進出に戦略的側面から足かせをはめられていた米産業界が大きな利益を受けるのは確かだ。これは、レーガン再選への一つの支援材料になる。だが米国の大衆の目から見れば、「親友になろうとしてやって来たというよりもカネが目的」という冷たい印象はぬぐえない。歓迎ムードが盛り上がりながら、自然なことかもしれない。記者はバリ特派員時代、華国鋒総理

(当時)の欧州初訪問を取材した経験がある。ジスカールデスタン仏大統領(当時)との会談のあと、エリゼ宮筋が「華総理は暗記してきた原稿を棒読みするような発言をするだけで、全く交渉、協議という形にならない」と批判していたのを思い出すが、今回の首脳会談でも、同じような印象が米政府高官の側にあったのではあるまいか。これはいづれ米側当事者にただしてみなければならぬ問題だと思ふ。

また中国側の報道機関に対する姿勢も問題なしとしない。米側はウルホウィツソ国務次官補以下が、事前事後に詳細なブリーフィングをやった。中国側のワシントンでの発表はゼロ、会談の内容は全て米側の「一方的発表」に基づいてしか書けない。この点では、ソ連以上に西側マスコミに対する配慮、あるいは操作能力が欠けているといえよう。

唯一のハプニングは、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の朝鮮半島三者会談提案に対する、「レーガン大統領の四者会談提案」である。これは最後のホワイトハウス夕食会の席上、プー代表取材に入っていた六人(何とうち三人は女性である)のうちの一人、韓国系米人女性

記者の体当たりの質問に、レーガン大統領が「中国も入るなら結構じゃないか」と答えたことが、反対提案として伝えられたものだ。

大統領がクロス承認とか、北朝鮮提案とかに通じていたとは考えられない。華麗なディナーパーティーが別室のエントリーインメント会場へ移動するとき、この女性記者が一瞬鋭く放った質問が、一大ニュースをつくるきっかけとなった。

この夜ワシントンは大雪だった。夕食会が始まったところでその日の送稿は打ち止め、として帰宅した新聞記者がほとんどだった。プール記者の一部と、それを外側でじっと待ち続けた少数の記者だけが即刻、大統領発言を「反対提案」として世界に報じた。他の大部分は、大雪のワシントンの深更、東京から、ロンドンから、パリからたたき起こされ、追跡させられた人々だ。

ニュースは工夫と忍耐と意欲で創られる……そういう教訓を改めてかみしめさせられた事件だった。

東証ダウ1万円突破

ワーキングプレス

世界的な景気回復期待が高まる中で、日経ダウは史上初の1万円の大台に乗せた。今回の上昇相場が始まったのは一昨年(昭和57年)の十月。まだ、世界同時不況の真ただ中であつた。株式相場はその後の景気回復、企業業績の回復を先取りして上昇し続けたわけで、まさに経済や景気の「体温計」としての役割を果たしてきたといえる。

歴史的な大相場は目先の景気回復だけでなく、産業や経済の質的な変化を先取りしているといわれる。たとえば、日経ダウが初の千円台に乗せた三十五年の株式相場が、復興経済から本格的な高度成長経済の到来を先見していたように――。すでに一年二か月におよぶ今回の長期上昇相場は、一体何を先見しているのだろうか。

結論から先にいうと、企業の変身、日本の変身を見ているのではない。低迷業種から先端成長産業への脱

皮、「重厚長大」から「軽薄短小」への転換に期待をかけているともいえる。

東京証券取引所の中にある兜クラブには、日本経済を動かす東証上場企業(千四百二十七社)が年二回、企業経営の「通信簿」ともいえる決算の発表にやってくる。決算発表が集中するときには、一日に二百社近くの発表がある。発表席に座つた経営者の顔付きが最近、変わつてき

育ち始めた先端新分野

黒川 勲

(日本経済新聞社証券部)

た。決算の内容が悪くても、先行きに自信をのぞかせる経営者がふえてきた。自信を裏付けているのが、新技術や新商品。海のものとも山のものとも分からなかつた新分野が、将来の夢を託せるころまで育ちつつあることを物語っている。

さらに印象風という、新技術開発、提携や合併といった企業の将来を大きく変えるニュースが相次いでいるし、こうした類のうわさで株価

が乱高下すると、当の企業の担当者「真相」を明らかにするため、兜クラブに駆けつける。うわさ通りではないにしても、憶測を呼ぶような火種を抱えているケースも少なくはない。

第一次石油ショックから十年、企業の生き残りをかけた必死の経営努力が、ここへきて企業の中味を大きく変えようとしている。電線メーカーから光ファイバーメーカーに変身を遂げつつある住友電

工や、化学メーカーからIC関連メーカーに脱皮しつつある信越化学工業が典型例だ。個々の企業の変化が、日

本の産業構造そのものを変えかねない。日経ダウ1万円時代は、そんな時代の到来を先見しているといえる。

兜クラブは、こうしたマイクロ経済情報の最先端取材基地。それだけに常駐メンバーだけで十七社百五十九人、非常駐六社を含めると百七十人の大部隊が取材態勢を組み、内外に情報を流しているが、日本企業の質的な変化にまず、着目したのが外人投資家。将来、有望という見極めをつ



日経ダウ1万円乗せに拍手がわく
東証立ち会い場内(1月9日)

けると、大胆に買い上がるから相場は外人の出方次第。外人投資家は、米国の金利やニューヨーク株価、円相場の動向に左右される。かくて日本の相場は、ニューヨークの「写真相場」といわれるほどの国際相場になつてしまつた。米国企業の決算や乗用車販売台数にも反応する東京市場。外人が「日本の変身」を買った、といつても、将来に期待をかけた先見相場だけに、波乱はつきもの。海外の動向次第でどうなるか分からないという不安がつきまとう。「こうなつたら、ニューヨークに兜クラブ分室を置く必要がある」――日経ダウ1万円時代を迎え、こんな声も上がっている。

北陸から五人の閣僚

ワーキングプレス

昨年十二月二十七日、発足した第二次中曽根内閣の数ある特徴のひとつとして指摘されたのが「地域偏重型」の布陣であった。特定の府県から一挙に閣僚が輩出した、との意味合いで、とりわけ、わが東京支社報道部が取材エリアとしている石川、富山両県を合わせ、実に五人もの閣僚が誕生した。

それも、閣僚名簿順に、住法相(富山一区)、森文相(石川一区)、奥田郵政相(同)、坂本労相(石川二区)、稲村国土庁長官(同)と極めて変化に富んだ陣容で、今日、「北陸内閣」あるいは「石川内閣」と称されるくらい。時には「むかし薩長(明治の藩閥政府)、いま北陸」とすらいわれるに及んで、その皮肉混じりのニュアンスを先刻承知でなお、まず郷土の一人としてささやかな充足感を抱かせてもらっている。

とはいえ、組閣当時の取材状況を顧みるに、そんな悠長

な感慨はさらさらなく、ただ、もうてんやわんやの状態で走り回った。なにせ、結果的に空前であり、絶後になるかも知れぬ大量入閣とあれば、混乱しない方がおかしい。それでも完べきと納得できる紙面づくりには肉迫した次第である。

取材陣は本社政治部長、東京報道部長の陣頭指揮の下、総勢七人。従来の組閣取材にない、大がかりな陣容を整えたのは、もともと石川、富

総勢七人での組閣取材

山本 彬

(北国新聞東京支社報道部次長)

あんばい。予定稿はある程度、用意しておいたものの、時々刻々変わる情勢を踏まえ、書き足し、書き変え、時間との勝負にせき立てられての大幅な紙面変更も。

おおむね首相官邸、国会記者会館、衆院議員会館、自民党本部の四地点をベースとし、それぞれ連携を密にしたが、連絡の行き違いによるものかしさは東京での取材につきものの物理的ハンディで、ひとえにここの臨機応変が要求された。

山両県選出の自民党国会議員に「入閣適齢組」が多く、最大限の可能性を想定したからであり、「物々しいな」と皮肉を浴びせる他社の視線もものは、そこそ水も漏らさぬ取材網を張りめぐらした。

といっても、しょせんは人事。予期せぬ展開を覚悟しておかなければならず、現実に入ったんはマークを弱めた人物が早い段階で有力となり、いわば「当確」と見られていた代議士が容易に決まらぬ、といった

近く。さながら呆然自失といった態に見えた他紙をしり目に、成し得るぎりぎりの紙面を構築した、との快い疲労で一同、思わず顔を見合わせ、ニッコリしたもののだが、ただちに認証式を経て正式に船出する「第二次中曽根丸」へ向け、翌二十八日の取材打ち合わせ。

とくに取材班自らが課した狙いは、石川県人四閣僚のそろう踏みの写真撮影、さらににその日のうちの座談会の開催であった。閣僚に就任



し、始動したその多忙な初日に、同時刻、同じ場所に四閣僚をそろえるのは、常識的にいって、至難の業に近い。が、さい配を振る両部長の執念でこれを実現し、在京の他社記者をして「よくぞやったもの」とうならせたものであった。おそらくは二度とないであろうこの貴重な取材体験を雄弁に物語ってくれるのは、あるいはこの一枚の写真だったといえるかもしれない。(右から森、稲村、坂、奥田の各大臣)ましてそれぞれの個性も際立って違い、ライバル意識のおう盛な四氏を、あのタイミングでそろえ得た妙味には多くの教訓が込められている、と改めて実感している。感して昨今である。

正月スポーツ花盛り

ワーキングプレス

さすがは世界屈指のスポーツ王国というべきか。スポーツ界は元旦早々からビッグイベントが目白押し。昨今の運動部記者にとって正月は、シーズン真っ最中と変わらぬかき入れ時となっている。つい数年前までは、十一月も半ばを過ぎると、スポーツのスケジュールは土、日曜を除いてほとんどなくなり、「主なものなし」という日がかなり目についたものだった。

それが、昨年は十二月二十九日から沖繩でヨットの国際試合がスタートしたこともあって、大晦日まで一日もスポーツの行われない日はなかった。まさに「からの鳴かぬ日はあつても……」である。

オリンピックイヤーを迎えて活気づく一九八四年の幕開けを飾って元旦に開催された競技はサッカー、ラグビー、陸上、ヨットの四競技。最もファンの関心を集めたのはサッカーで、午後一時半から国立競技場で開始された全日本

選手権決勝の日産対ヤンマーの試合に、約三万五千人の観衆が詰めかけた。

試合は2-0で日産が初優勝したが、取材記者は正月気分ひたるどころではない。スタンドの嗜着の娘さんを横目に見ながら、あわただしく取材の筆を運ぶはめになる。

そのうえ、翌二日からは全国高校選手権の試合が一齐に始まる。大会は五日を除き八日の決勝まで、びつ

大忙しの運動部記者

伊藤 修
(東京新聞運動部次長)

しりカードが組まれているため、サッカー記者でいる以上、正月三日日はおろか、七草を過ぎるまで休みはない。

陸上担当記者も大変である。恒例の東京箱根間大学往復駅伝競走が読売新聞社前をスタートするのが二日の午前八時。事前取材のため一時間前には現場に足を運ぶから、それこそ五時、六時起きとなる。さらにその夜は箱根泊まり、家族連れで満

員の旅館の一室で、同僚のいびきを聞きながら、正月の夜を送るのだから、新婚の記者などは気の毒である。

今年は特に名門早大が、三十年ぶりの優勝を目指すとあって、各社の力の入れ具合はひとしおのものがあった。また、レースがスタートすると、早大のランナーたちは中村清監督の思いのままに首位を独走。圧倒的な強さを発揮して宿願を達成したため、各社とも送稿量はぐんと

はねあがり、正月早々、昼食にもありつけない記者が続出した。

ラグビー担当も忙しい。二日が国立競技場で大学選手権の準決勝。同日花園では全国社会人大会が幕を開けている。花園は高校選手権との隔日開催である。大学選手権の決勝、同大対日体大の試合が七日で、早明両校を欠いたとはいえラグビー人気は衰えず、スポーツ新聞は四、五人もの記者をつぎ込む力の入れようだった。

社会人選手権は翌八日が決勝。担当記者は一齐に花園にとび、新日鉄釜石の六連覇の取材に当たる。この



鉄冷えとんでけ 新日鉄釜石6連覇達成(1月15日 国立競技場)

あと十五日の日本選手権で新日鉄釜石が同大を圧倒、輝く六連覇を飾ったのだが、それまでも両軍の練習取材などで休みはない。

このほか、バスケットボールの全日本選手権が二日の開幕で、八日まで七日間のぶつ通し。三日の国立競技場は、アメリカンフットボールのライスボウルに三万五千人の観衆が熱狂するなど、正月スポーツはまさに花盛り。観客動員が望めるとあって、今後ますます拍車のかかりそうな情勢である。

先月のクラブゲスト

鈴木淑夫 日本銀行金融研究所 副所長



【六日(金)】 シリーズ研究会「世界経済の課題」(Ⅴ) テーマ「世界経済の動向と日本」 司会 平田真巳企画委員 出席 六〇人

中村孝士 東京経済大学教授



【九日(月)】 シリーズ研究会「世界経済の課題」(Ⅵ) テーマ「個人消費動向から見た日本経済」 司会 平田真巳企画委員 出席 六三人

竹中一雄 国民経済研究協会会長



【二十三日(月)】 シリーズ研究会「世界経済の課題」(Ⅶ) テーマ「世界経済と日本」 司会 平田真巳企画委員 出席 四一人

'84年の世界経済動向とわが国の景気見通しについて、以上三氏から話を聞く。昨秋からの米国経済の急テンポの回復のせい、今年の経済見通しは一転して楽観論主流だが...

関川栄一郎 航空評論家



昨年のKAL機撃墜など、近年の航空機事故の特徴と傾向などを聞く。世界の定期民間航空での事故と死亡数は、大体一年間に二〇〜四〇件、三五〇〜一三〇〇人。昨年の発生件数二一件、死亡数一〇一人。この傾向はここ二〇年ほど定着している。ある意味で安全対策の限界に直面しているの

で、「現在、NASAで研究中の燃料ゼリ一化(エンジンに入れる直前に液化)や一層の自動操縦化の実現が期待される」。関川氏の話の前に、約三〇分、司会の石山氏が、飛行機利用者の最低必要知識を、出席者だけに特別サービス。【二日(水)】 研究会「手のつけられない問題」(Ⅷ)「航空機事故」 司会 石山四郎企画委員 出席 三五人

野坂昭如 作家



言葉と金の戦い、選挙を戦ったが、自身、民主主義、地方文化などの言葉を、どの程度掘り下げ吟味して使用したか、と反省しきり。ともすれば盲目的

なデモクラシー信仰に陥りがちと、焼け跡闇市派の苦ちゅうも率直に語る。現実から離れられない作家の目は、きわめてジャーナリスティックでかつ誠実。中曽根評や越山会についてのコメントも興味深い。【二日(水)】 夕食会 司会 水野亮企画委員 出席 四〇人

中曽根康弘 内閣総理大臣



昨年の一ヶ月と同じ日の昼食会となった。総理は昨年二度当クラブのゲストスビーカーにな

った。一月、韓国から帰国した翌日、「総理になるまでは予備運動。オポチュニストといわれようが、風見鶏といわれようが、総理になってからが本番」といささか力み「これまでの勉強や蓄積を一挙に実行し、政治家としてやるべきことをやり、批判を受けて去っていく」と語った総理。

二度目はサミット前の五月十九日、外交成果での自信と余裕のせい、一転して「リラックスモード」だった総理。そして今回は「熱いお灸をすえられまして」とはじめから低姿勢、持ち前の歯切れのよさが姿を消す。

【三日(金)】 昼食会 司会 新井明理理事長 出席 二三人

ジャン・ル・ガレック フランス首相付計画担当政務次官



第九次五年計画(八四〜八八年)をまとめた経済計画担当の閣外相とあって、国有化問

題や貿易摩擦問題で、質疑応答がかわされた。【二〇日(金)】 記者会見 司会 友田錫企画委員 通訳 弥水康彦 出席 三〇人

後藤田正晴 行政管理庁長官



前日に新年度予算政府案と当面の行革実施方針が発表され、この日、自民党大会。そこから

直行しての昼食会。カミソリの異名を持ち行政にも明るだけに、政局、行革それぞれについて、オフレコを混じえ鋭く味のある発言。最後に「記事にするときはよく考えて書いてヨ」。【二六日(木)】 昼食会 司会 一木豊企画委員 出席五八人

第47回会報委員会

昭和59年1月11日(水)
日本記者クラブ小会議室

十二月号、一月号の反省、意見交換の後、二月号の編集方針を協議した。

三月号の『とっておきの話』は渡辺誠毅氏に執筆依頼することにした。

出席 深谷委員長。桂、井出、斎藤、安延の各委員。

第78回会員資格委員会

昭和59年1月11日(水)
日本記者クラブ小会議室

二月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 水上委員長。細川、赤松、長沢、亀山、内藤、埜呂、長竹の各委員。

第108回企画委員会

昭和59年1月13日(金)
日本記者クラブ大会議室

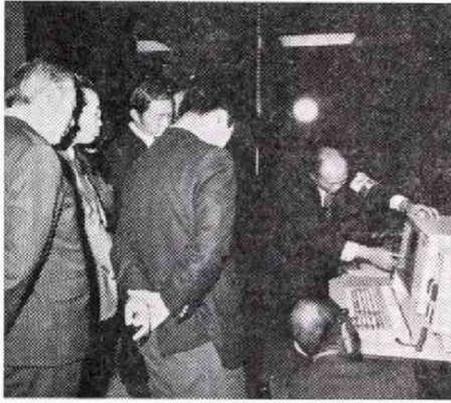
故泉田豊委員(フジテレビ)の冥福を祈って、出席者全員で黙とうした。

行事報告の後、二月のゲスト選考と行事について意見を交換した。ホーク・オーストラリア首相、キムヒ イスラエル

外務次官をゲストとして招くことを決定。また、研究会「ソ連」は、前ソ連公使の小和田恒外務省条約局長を、研究会「手のつけられない問題」は映画監督の

OAシステム見学会

(NEC我孫子事業場 一月二十五日)



①事業場内の情報の流通化と共有化の実現②ヒラから管理職まで使える簡便さ③一台の端末機に多様な用途を④進歩の速さに対応するフレキシビリティの確保——こんなことをポイントにおき、C&Cコンセプトの具現化、プロトタイプとして、総合的なOAシステムの完成につとめている、と小野敏夫C&C推進企画室長は説明する。
目玉はアラジンと呼ばれるオフィスシステムで、電子メール、電子ファイリング(個人用と共有用あり)、電子伝票起票がどの端末からも可能なばかりでなく、同じ端末がワープロ、パソコンとしても使える仕組み。

山本晋也氏を、研究会「軍事技術」は防衛庁陸幕運用課長の西元徹也氏をそれぞれ講師として招くこととなった。

出席 伊藤、森本、友田、広瀬、有賀、藤岡、石丸、高野、水野、武藤、河野、有馬、石山の各委員。

第72回理事会

昭和59年1月19日(木)
日本記者クラブ大会議室

一、クラブ功労者の処遇に関して、渡辺総務委員長から、第27回総務委員会できまとめられた内容が答申された。同答申どおりクラブ草創期の功労者である、原四郎(初代)、高田秀二(第二代)の両元理事長を名誉会員として、第22回臨時総会に推挙することを決定した。

一、会員資格委員会から答申のあった二月一日付の会員入退会を承認した。

一、放送開始30周年を記念して、日本テレビ放送網から寄託された百万円を、日本記者クラブ賞基金にくり入れることを決定した。

一、全国朝日放送での吉岡秀夫氏から松元真氏(報道局長)への理事交代、および福島民友新聞社の伊藤修二氏から番照男氏(取締役東京支社長)への監事の交代が報告された。

出席 新井理事長、中江副理事長。渡辺(襄)、水上、小林、若松、田中(義)、田中(武)、東、渡辺(修)、松元、

深谷、山田、泉、前田、田窪(滝口代理)の各理事。谷田監事。

第22回臨時総会

昭和59年1月19日(木)
日本記者クラブ宴会場

一、名誉会員推薦に関する件
第72回理事会の議決どおり、クラブ草創期の功労者として、原四郎(初代)、高田秀二(第二代)両元理事長を名誉会員とすることを決定した。

一、役員の交代に関する件
昨年五月開催の第21回総会以降の役員交代を左記のように承認した。

(理事)
読売新聞社(加藤祥二氏↓水上健也氏)
西日本新聞社(宮田弘司氏↓滝口凡夫氏)
日本新聞協会(江尻進氏↓山田年栄氏)
全国朝日放送(吉岡秀夫氏↓松元真氏)
(監事)
福島民友新聞社(伊藤修二氏↓番照男氏)
(出席法人会員 二七社 委任法人会員 九〇社)

第6回施設運営委員会
昭和59年1月24日(火)
日本記者クラブ小会議室

前回に引き続き委員会がクラブを利用する際のルールブック「クラブ利用のお願い」について検討した。

出席 小林委員長。梅本、高橋、山崎の各委員。

プロフィール

一月、二月入会の個人D会員、法人賛助会員、個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

紹介 会合

- 6日▽シッピング・フンド・トレッド・ニュース賀詞交換会 (東京ニュース 赤坂賢治会員) 9日▽海外広報協合理事会 (朝吹誠会員) 10日▽車社会研究会(東京 茂野豊次会員) 12日▽広告委員会(協会 権田萬治会員)▽ニューメディア関係専門研究会 (協会 田所泉会員)▽秋元・北村兩氏送別会(中日 岩井正彦会員)▽丹羽健夫さんの出版を祝う会(毎日 四方洋会員) 13日▽新聞営業部キックオフ——84年方針発表会(日本IBM 椎名武雄会員)▽新聞通信調査会・同盟育成会・同盟クラブ新年互礼会(殿木圭一会員)▽新聞製作人新年合同名刺交換会(協会 桂敬一会員) 14日▽科学論懇談会(日経 堤佳辰会員) 17日▽テレビ大賞審査委員会—NHK テレビ小説「おしん」が大賞を受賞 (東京ニュース 田中耕蔵会員)▽FPC新年名刺交換会(斎藤鎮男会員) 18日▽新聞協会新年懇親会(山田年栄会員) 21日▽政経文化クラブ新春例会(奈良新 中川雅裕会員) 23日▽ロンドン記者会総会(共同 亀山旭会員)▽読売日本交響楽団新常任指揮



ロンドン記者会総会のパーティーに招かれた
コートツァ駐日英大使(右から二人目)
【1月23日 宴会場】

者ハイイツ・レークナー記者会見(読売 杉林昇会員) 24日▽ラジオ・テレビ番組配信用者交歓会(東京ニュース 鶴田収会員) 25日▽関東U四局会議(TVK 田代昌史会員) 26日▽広告料金改定説明会(高知新 梅原薫明会員)▽放送記者懇談会(民放連 河野昌之会員) 27日▽加盟社論説研究会・懇親会(共同 白田昭三郎会員)▽徳島クラブ懇親会(徳島新 谷田匡会員)▽東京愛媛クラブ新年宴会(愛媛新 堀定省会員) 30日▽山本武さんを囲む会(朝日 斎藤勝会員) 31日▽経済論懇談会(サンケイ 五十畑隆会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った会合の主なもの。一月の総回数は七三回でした。)

●囲碁同好会○

一月二十八日の例会は十四人が参加、総対局数二十五局で、次の各氏が優秀な成績をあげました。

石崎信治五段(会友)、大日向一郎三段(日経映画)、斎藤吉史二段(D)。

現在、囲碁同好会は会友を含めて四十余名、会長は新井明理事長(日経)。毎月一回の例会と年二回の大会(六月と十二月、十二月は大軒杯争奪戦)を催しています。

次回は二月二十五日(土)午後一時からです。初めての方も歓迎、事務局へお申し込みください。

■ゴルフ会■

第三十九回ゴルフ会は左記の要領で開催されます。

今回は第三代優勝杯の取り切り戦も同時に行います。

日時 四月六日(金) 午前八時五十分集合

コース 小金井カントリー倶楽部
(〇四二三一八—一二二二)

競技 18ホールストロークプレー
会費 二五、〇〇〇円

参加ご希望の方は、二月二十九日(水)までにクラブ事務局へお申し込みください。

事務局からのお願い

昼食会のキャンセルは

一時間前までに

昼食会に申し込んだあとで、都合が悪くなった場合は必ずキャンセルの電話をクラブ受付へお願いいたします。キャンセルは昼食会の一時間前まで有効です。無断で欠席の場合は、会費(食事代)をご負担いただくこととなりますので、ご注意ください。

コピーはセルフサービスで

受付前のゼロックスはセルフサービスでお願いします。料金は一律一枚三〇円、縮小・拡大も可能です。お手数ですが、伝票に利用枚数を記入のうえ、受付で料金をお支払い願います。

宴会、会議室、レストラン

予約は(五〇三)三七六六で

各会議室の予約、レストランのテーブルリザーブ、料理注文などは、出来るだけ(五〇三)三七六六のクラブ受付直通電話でお願いいたします。なお、この電話は転送が出来ないため、ラウンジにいる会員の呼び出しなどは、従来通り(五〇三)二七二一でお願いいたします。

写真部

1月8日、大相撲初場所初日、蔵前国技館。隆の里—保志戦。物言いのついた一番である。隆の里はこの場所、13勝2敗で4回目の優勝を果たした。保志は9勝6敗で、先場所に続き2度目の敢闘賞を手にした。

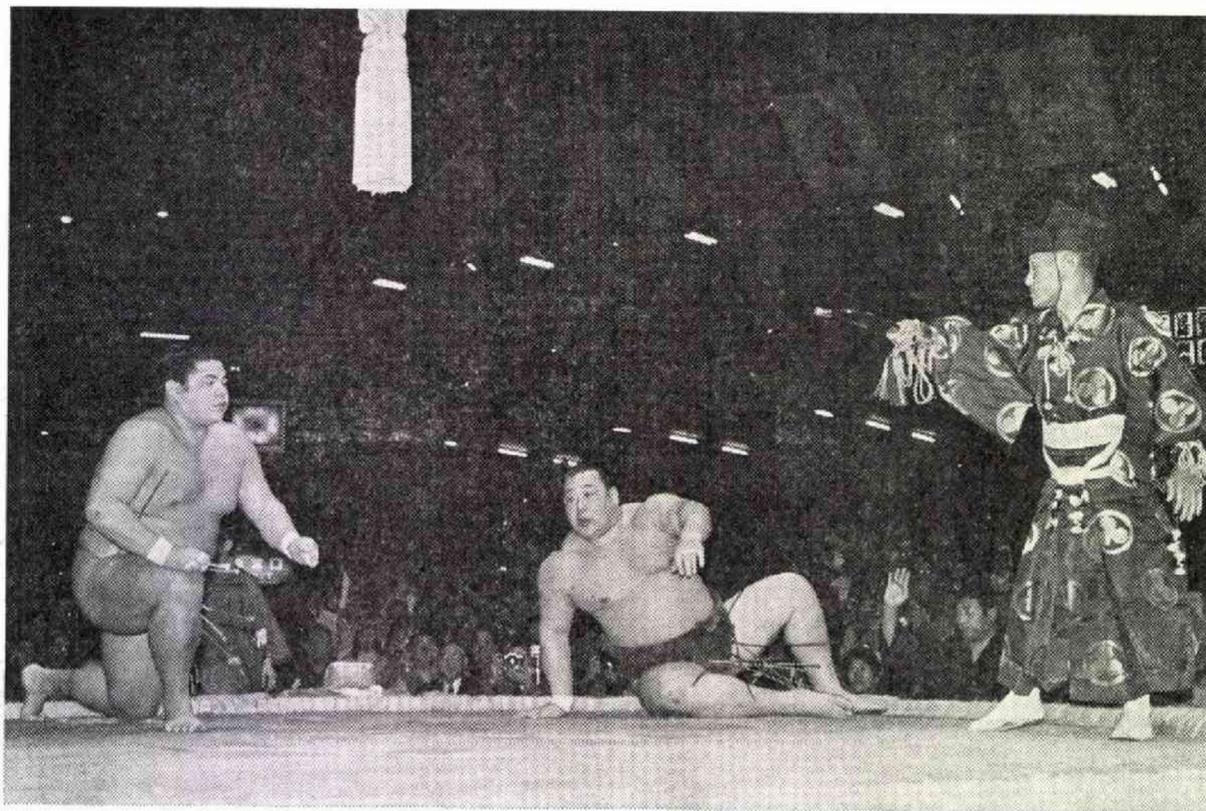


写真 山口良吾 (時事通信社写真部)

固定画面の味わい

隆の里が保志からホンを拾った——できの悪いシャレみたいな勝負の瞬間。それができのすばらしいシャッターの「決め手」となっている。大相撲初場所初日、横綱は新小結の首投げに横転、行司式守伊之助の軍配がサツと東の保志に上がる。やった、といった保志の微笑み。そんなはずは、といわんばかりの横綱の不服顔。とたんに放駒親方が物言いの手を上げる：四つの表情がピシャッと一枚に固定する。テレビで見ている保志が勝ったと思う。それが再三再四のビデオ再生で、なるほど横綱が残っていたのかと納得させられる。動く画面の合理的効果だが、一枚のこの写真はテレビにも、また組み写真にも果たせない物語性をじっくり味あわせてくれ、なにくれとない想像まで誘い出す。固定画面の魅力である。カメラ位置を移動するゆとりもない秒瞬の角度からこの構図を決めたとき、カメラマンも「やった」と思ったに違いない。報道写真家の「身上」であろう。(文 三樹精吉会員)

「福引」景品提供社

左記の会員社から「福引」用の景品をご提供いただきました。厚くお礼申し上げます。(順不同)

- 朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、日本経済新聞社、サンケイ新聞社、共同通信社、中日新聞社、北海道新聞社、西日本新聞社、時事通信社、河北新報社、信濃毎日新聞社、新潟日報社、北国新聞社、京都新聞社、神戸新聞社、山陽新聞社、中国新聞社、高知新聞社、南日本新聞社、静岡新聞社、東奥日報社、岩手日報社、秋田魁新報社、山形新聞社、福井新聞社、愛媛新聞社、徳島新聞社、四国新聞社、大分合同新聞社、福島民報社、福島民友新聞社、沖縄タイムズ社、朝日イブニングニュース社、日刊工業新聞社、日本海事新聞社、エスピー通信社、陸奥新報社、下野新聞社、神奈川新聞社、千葉日報社、山梨日日新聞社、奈良新聞社、フクニチ新聞社、宮崎日日新聞社、琉球新報社、A P通信社、日本新聞協会、日本プレスセンター、日本放送協会、東京放送、日本テレビ放送網、フジテレビジョン、全国朝日放送、テレビ東京、朝日放送、関西テレビ放送、文化放送、ニッポン放送、九州朝日放送、日本短波放送、エフエム東京、北海道テレビ放送、青森テレビ、東北放送、秋田放送、静岡放送、北陸放送、KBS京都、サンテレビジョン、和歌山放送、中国放送、南海放送、日本民間放送連盟、テレビ新広島、東京電力、服部セイコー、電通、アラスカ、日本コンベーションサービス、サントリー、王子製紙、帝人、トヨタ自動車、日産自動車、日本新聞インキ、日本航空、日本ABC協会、国際ピーアール、川鉄商事、ニッカウキスキー、富士石油、日本放送出版協会、東京ガス、

日本コカコーラ、ゼネラル石油、放送文化基金、エッソ石油、三菱自動車工業、BASFジャパン、日本電気協会、東和電気工業、第一企画、安田火災海上保険。

会員の著書(ご惠贈いただきました)

ロンドン暮らし

浅井泰範

日本占領革命 上・下

大前正臣訳

寄贈書

国際報道の危機(上)

(財)新聞通信調査会

Wirtschaftspartner JAPAN

ドイツ商工会議所

クラブ訪問記

12月13日/デイニス・デア・ブロー スペイン記者協会

会長 1月9日/ギルバート・ジョージ豪日交流基金
 東京事務所長 24日/アムノン・ベンヨハナン駐日イ
 スラエル大使 ジョセフ・ベドット広告業社長(サン
 フランシスコ・プレスクラブ会員) 25日/クリフト
 ン・フォスター元アメリカ大使館広報参事官

ゲスト・カード

デイニス・デア・ブロー スペイン記者協会会長(「デア・アリオ・テ・ノテイチアス」紙)

展覧会の招待券

朝日新聞社から「現代書道20人展」「橋本関雪展」「ポール・デルボー展」「肉筆浮世絵名作展」の招待券をいただきました。なお、「肉筆浮世絵名作展」(2月17日~29日・東急百貨店日本橋店)はまだ残りがありません。ご希望の方は受付へお申し出ください。

計報

昭和五十七年六月から当クラブの企画委員をつとめられていた泉田豊会員(フジテレビジョン)が、一月六日食道ガンのため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

二月の行事

- 1日(水) 正午~午後2時 田川誠一自治大臣昼食会 クラブ宴会場
- 2日(木) 午後1時~2時30分 シリーズ研究会 『ソ連—その実態と意図』(V) 小和田恒前ソ連公使 クラブ記者会見室
午後3時~4時15分 ホーク オーストラリア首相記者会見 クラブ宴会場
- 10日(金) 午後2時~3時30分 バートン・M・セーピン ジョージワシントン大学教授 授講演会 クラブ記者会見室
- 15日(水) 午後2時~3時30分 研究会『手のつけられない問題—SEX産業』 山本晋也氏 クラブ宴会場
- 16日(木) 午後2時~4時 シリーズ研究会『軍事技術』(V) 西元徹也防衛庁陸上幕僚監部運用課長 クラブ記者会見室
- 17日(金) 午後3時30分~5時 タビット・キム ヒイスラエル外務次官記者会見 クラブ記者会見室

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
 連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三—二七二一